

第1回「高村・宮中塾」レジメ

日時： 2023年2月23日(木祝) 10:00~12:00
場所： 広島県労働者学習協議会事務所+Web
ID: 832 1915 1665(パスコード: 277557)

(1) 学習会のすすめ方

高村・宮中の対話形式でテーマの中身を解説。その後、参加者による質疑・討論を交えて内容を深める。

【タイムテーブル】

10:00	開 講 宮中より塾の説明
10:05	テーマⅠの解説
10:25	質疑・討論
10:40	テーマⅡの解説
11:00	質疑・討論
11:15	休 憩
11:25	テーマⅢの解説
11:45	質疑・討論
12:00	閉 講

【進行】 10:00~12:00 テーマの解説@20分 質疑・討論 @15分 ×3セット(予定)
--

(2) テキスト等について

- レジメを毎回配布(学習内容のポイントを要約したもの)
- テキストとしては
 - ・ヘーゲル「小論理学」(松村一人訳 岩波文庫)
 - ・高村さん著「ヘーゲル「小論理学」を読む」(第2版 全4冊)

(3) 討論のテーマについて

討論テーマについては、高村・宮中で事前に協議のうえ設定します。
3回目までの討論テーマは下記を予定。(変更する場合があります。)

日程	討論テーマ
第1回 2/23(日)	I)なぜ世界を物質と精神に二分できるのか
	II)なぜ観念論がはびこるのか
	III)綱領はなぜ唯物論的見地と言えるのか
第2回 3/26(日)	I)情勢を読み解くとは
	II)「政治対決の弁証法」とはなにか
	III)ヘーゲル哲学は観念論か
第3回 4/23(日)	I)形式論理学とはなにか
	II)ゼノンのパラドックスとはなにか
	III)形式論理学の意義と限界について

第1回「高村・宮中塾」 ポイント・討論テーマ

テーマⅠ なぜ世界は物質と精神に二分できるのか

1) デカルトの二元論

- 哲学者は世界の根源とはなにかを求めて、世界を抽象し、より上位の概念を抽象により求めていく。
- 「近代哲学の父」デカルトは、抽象の最後の到達点として、世界の根源を「われ思う、ゆえにわれあり」として、思考（精神）と存在（物質）に求めた。
- 「われ思う」という「思考」と「われあり」という「存在」という、2つの概念以上の根源は存在しない。

2) 哲学の根本問題は思考と存在のどちらを根源的とするかにある

- 思考の根源性を主張する観念論と、存在の根源性を主張する唯物論の対立。
- 対象の変革を求めるものは、対象を分析・総合して研究する科学としての唯物論の立場に立つ。

テーマⅡ なぜ観念論がはびこるのか

1) 観念論は支配階級のイデオロギー

- 支配階級は変革を望まないから、宗教などの観念論に走る。
- 階級対立の社会では、支配階級が存在するから観念論がなくなる。

2) 政治とは未来社会に関する階級間のイデオロギー闘争の場である

- 支配階級は未来社会を思考の所産であるとして観念論的未来社会を論じる。
- 労働者階級は「発展法則」にもとづいて唯物論的未来社会を論じる。
- 労働者階級が階級闘争に勝利して階級を廃止しない限り観念論はなくなる。

テーマⅢ 綱領はなぜ唯物論的見地と言えるのか

1) 綱領は科学的社会主義の政党である日本共産党の根本方針を示すもの

- 日本共産党は科学的社会主義の党として、社会変革の党である。
- 日本共産党は社会変革のために、唯物論という科学の立場に立って社会を研究し、綱領にまとめる。

2) 綱領は唯物論の立場に立って「発展法則」により未来社会を展望する

- 人間は「自由な意識」と「共同社会性」、つまり自由と平等という本質をもつ
- 資本主義社会は人間の本質を疎外する社会であり、未来社会は人間の本質を解放する人間解放の社会である
- 綱領は、「発展法則」により、資本主義社会における「人間の本質と人間の本質の疎外の対立・矛盾」を解決して、「真に平等で自由な人間関係からなる共同社会」（綱領）という人間解放の未来社会を実現する

参考資料①

「新訳 ドイツ・イデオロギー」からの抜粋

支配的階級の諸思想は、どの時代でも、支配的諸思想である。すなわち、社会の支配的な物質的力である階級は、同時にその社会の支配的な精神的力である。

物質的生産のための諸手段を自由にできる階級は、それとともに精神的生産のための諸手段を意のままにするのであるから、それとともに、精神的生産のための諸手段を欠いている人びとの諸思想は、概してこの階級の支配下にある。支配的な諸思想は、支配的な物質的諸関係の観念的表現、すなわち、諸思想として把握された、支配的な物質的諸関係以外のなにもものでもない。

したがって、それは、まさに一方の階級を支配的階級にする諸関係の観念的表現であり、したがって、その階級の支配の諸思想である。支配的階級を形成する諸個人は、とりわけ意識をもち、それゆえに思考する。したがって、彼らが、階級として支配し、そしてある歴史時代の全範囲を規定するかぎり、つぎのことは自明である。

すなわち、彼らは、このことをその歴史時代のひろがり全体においておこなうのであり、したがって、とりわけ思考する者として、諸思想の生産者としても支配し、彼らの時代の諸思想の生産と分配を規制するということ、したがって、彼らの諸思想はその時代の支配的諸思想なのだということである。



P. 59 の抜粋

出典：【新訳】ドイツイデオロギー 服部文男 監訳(新日本出版社 1996. 7. 25)

参考資料②

科学的社会主義セミナー

「マルクスと友達になろう～社会を変革する学び」から抜粋

2、マルクスの理論は世界の常識になりつつある

ところでみなさんは、自分が唯物論者であるか観念論者であるかを考えたことがありますか？

「ある」という人もいるでしょうし、「そんなことは関係ないよ」という方もいるでしょう。私はここで三つ、問題を出します(★)。その問題の答え方によって、みなさんがどっちの陣営に属するか決まるのです。

第1問 あなたは、人間が生まれる前に、地球があったことを認めますか。

第2問 あなたは、人間がものを考えるとき、脳の助けを借りていると思いますか。

第3問 あなたは他人の存在を認めますか。

【★ 世界観を試す三つの質問】

これは不破が思いつきで考え出したものではありません。20世紀の初期に、ロシアの革命運動の一部が「経験批判論」というカントまがいの観念論の一流派にとらわれたことがあって、レーニンがそれとの論争の書を書きました(「唯物論と経験批判論」1905年)。そのなかで、ここに唯物論と観念論の境界線があると、レーニンがロシアとヨーロッパの「経験批判論」者につきつけた設問を、不破が整理しまとめたものです。

最後の第三問について一言つけくわえますと、観念論の立場では、他人の存在は認められないはずですが、自分以外のすべての存在は、自分という精神が生み出した世界だと見るわけですから、今日のように何百人の人間がいても、自分以外は、実在しない相手だということになるのです。(中略)

話をもどしましょう。いまあげた三つの質問は、単純なようだけれども、唯物論と観念論の境目をキッチリ示している問題です。だから、いまの三つの質問に対してすべて「はい」と答えた人は、完全な唯物論者です。「唯物論では気に入らない」といっても、間違いなく唯物論者です。

ただ、それでも、隙があると、観念論が忍び込んできます。世間では、占いか超能力とかいうものがあるでしょう。隙があると、そういう非科学的な考え方が忍び込んできます。そこは、自然に唯物論を身につけたという段階から、自覚した唯物論者に自分を高めることが大事で、そういう面でも、マルクスやエンゲルスの本を読むことはたいへん大事になってきます。

P. 13~14 の抜粋



参考資料③

日本共産党綱領「三～二一世紀の世界」から一部抜粋

世界のさまざまな地域での軍事同盟体制の強化や、各種の紛争で武力解決を優先させようとする企て、国際テロリズムの横行、排外主義の台頭などは、緊張を激化させ、平和を脅かす要因となっている。

なかでも、アメリカが、アメリカ一国の利益を世界平和の利益と国際秩序の上に置き、国連をも無視して他国にたいする先制攻撃戦略をもち、それを実行するなど、軍事的覇権主義に固執していることは、重大である。アメリカは、地球的規模で軍事基地をはりめぐらし、世界のどこにたいしても介入、攻撃する態勢を取り続けている。そこには、独占資本主義に特有の帝国主義的侵略性が、むきだしの形で現われている。これらの政策と行動は、諸国民の独立と自由の原則とも、国連憲章の諸原則とも両立できない、あからさまな覇権主義、帝国主義の政策と行動である。

いま、アメリカ帝国主義は、世界の平和と安全、諸国民の主権と独立にとって最大の脅威となっている。

その覇権主義、帝国主義の政策と行動は、アメリカと他の独占資本主義諸国とのあいだにも矛盾や対立を引き起こしている。また、経済の「グローバル化」を名目に世界の各国をアメリカ中心の経済秩序に組み込もうとする経済的覇権主義も、世界の経済に重大な混乱をもたらしている。

軍事的覇権主義を本質としつつも、世界の構造変化のもとで、アメリカの行動に、国際問題を外交交渉によって解決するという側面が現われていることは、注目すべきである。

いくつかの大国で強まっている大国主義・覇権主義は、世界の平和と進歩への逆流となっている。アメリカと他の台頭する大国との覇権争いが激化し、世界と地域に新たな緊張をつくりだしていることは、重大である。

(一) この情勢のなかで、いかなる覇権主義にも反対し、平和の国際秩序を守る闘争、核兵器の廃絶をめざす闘争、軍事同盟に反対する闘争、諸民族の自決権を徹底して尊重しその侵害を許さない闘争、民主主義と人権を擁護し発展させる闘争、各国の経済主権の尊重のうえに立った民主的な国際経済秩序を確立するための闘争、気候変動を抑制し地球環境を守る闘争が、いよいよ重大な意義をもってきている。

平和と進歩をめざす勢力が、それぞれの国でも、また国際的にも、正しい前進と連帯をはかることが重要である。

日本共産党は、労働者階級をはじめ、独立、平和、民主主義、社会進歩のためにたたかう世界のすべての人民と連帯し、人類の進歩のための闘争を支持する。

なかでも、国連憲章にもとづく平和の国際秩序か、独立と主権を侵害する覇権主義的な国際秩序かの選択が、問われている。日本共産党は、どんな国であれ覇権主義的な干渉、戦争、抑圧、支配を許さず、平和の国際秩序を築き、核兵器のない世界、軍事同盟のない世界を実現するための国際的連帯を、世界に広げるために力をつくす。

世界史の進行には、多くの波乱や曲折、ときには一時的な、あるいはかなり長期にわたる逆行もあるが、帝国主義・資本主義を乗り越え、社会主義に前進することは、大局的には歴史の不可避的な発展方向である。

(2020年1月18日 第28回党大会で一部改定)

追加資料

エンゲルス著「フォイエルバッハ論」より抜粋

すべての哲学の、とくに近世の哲学の、大きな根本問題は、思考と存在とはどういう関係にあるかという問題である。(中略)

思考と存在との、精神と自然との関係という問題、哲学全体のこの最高の問題は、こういうわけで、すべての宗教におとらず、人類の野蛮時代の無知蒙昧な観点のうちに根を持っている。(中略)

もともと、存在にたいする思考の地位という問題は、中世のスコラ学においても大きな役割を演じており、なにが根源的なものか、精神かそれとも自然か、という問題は、尖鋭化して、教会にたいしては、神が世界を創造したのか、それとも世界は永遠の昔から存在しているのか、というところまでいきつた。

この問いにどう答えたかに応じて、哲学者たちは二つの大きな陣営に分裂した。自然にたいする精神の根源性を主張し、したがってけっきよくなにかの種類の世界創造を認めた人々は —そしてこの創造は哲学者たちの場合、たとえばヘーゲルの場合がそうであるが、キリスト教におけるよりずっとこみいったばかばかしいものになっていることが多い —観念論の陣営をつくった。自然を根源的なものと見なした他の人々は、唯物論のさまざまな学派にはいる。

観念論と唯物論というこの二つの表現には、もともと右に述べた以外の意味はない。(中略)

思考と存在との関係という問題には、しかし、別の側面がある。すなわち、われわれをとりまいて世界についてのわれわれの思想は、この世界そのものとどんな関係にあるのか、という問題である。われわれの思考は現実の世界を認識することができるのか。われわれは現実の世界についてのわれわれの表象と概念のうちに現実の正しい映像をつくりだすことができるのか？この問題は、哲学の用語では、思考と存在との同一性の問題と言い、哲学者の圧倒的多数はこれを肯定している。

出典：「フォイエルバッハ論」(全集 21 P. 278～280)

討論 メモ用紙

討論テーマⅠ なぜ世界は物質と精神に二分できるのか？ 10:25～10:40

〈メモ〉

討論テーマⅡ なぜ観念論がはびこるのか？ 11:00～11:15

〈メモ〉

〈メモ〉

